院内喫茶
シマエナガ

紋別医師会
雄武町国民健康保険病院　秀毛寛己（しゅうけひろみ）

学生の時からコーヒーと喫茶店に興味があり、将来は自分で喫茶店をと考えた時期もある。

現実的には、かなわなかったが職場では仕事とほぼ同等の情熱をコーヒーへ傾けてきたと思っている。以前には外来や病棟にエスプレッソマシンを配備、シリーズでカップもそろえ、また自らもバリスタのように職員に花模様のカプチーノをつくってふるまったりした。レギュラーでは神戸　元町（舌れ梵）トレボンのジャマイカ・ブルーマウンテンを手落としでサーバーに淹れて贅沢なコーヒータイムを過ごした。勤務先が変わり、前任地では環境も違って、遠ざかっていたのだが、現在の勤務地で院長室をセルフの喫茶室へと転用して全職員に開放している。イタリア製のWi-Fiマシンでほぼ自動でかなりのメニューがこなせるが、病院の立場上ミルクレシピをはずし衛生面を担保し利用をフリーとして各自休憩時に立ち寄ってもらっている。チョコもスイスのブランドの人気のものを常時配置して評判もいい。週に３回、月・水・金を営業日としている。

モチーフはシマエナガ。小さくても北海道オリジナル。そんな病院をとの思いで喫茶室の愛称も勝手にそう命名した。自らも店長とあちこちに吹聴して回っている。

学生時代のある夏休み、弟が神戸のタウン誌でトレボンを見つけた。ブルーマウンテンが300円？確かめるためふたりで元町の店に行き、ブルーマウンテンを頼んだ。当時でも考えられない安さだったのだがまさに絶品だったので衝撃を受けた。大阪で勤務するようになって週末など三宮に出かけると元町商店街を歩いて神戸海文堂書店に立ち寄りそれからトレボンに行く。北海道で生活するようになっても、神戸に帰省すると家に帰る前に必ず立ち寄るようになった。いつの間にか店のマスターやママの子供のような親近感で親しくさせてもらった。

絶対に値上げせえへんねん。ママの矜持だった。若いころは県立病院のナースだったそうだ。

高価なカイザーやウェッジウッドのカップにいれた300円のブルーマウンテンが人間国宝の作った時価数百万の砂糖ツボが無造作に置かれたテーブルに運ばれる。「誰もそんなことわからへんねんけど」といたずらっぽく教えてもらった。それから、思い出深い20数年がたって突然、マスターの携帯から着信があり、娘さんの明るい声で父が旅立ちました。どこへ？北海道に行きたいと言ってたので遊びに来るのかなどと想像しているとコロナで急に亡くなったと。

いつも店から帰るときに、絶対に小売りしないお店の豆を持たせてくれた。絶対にお金は受け取らない。「にいちゃん、むかしからいつもその窓際席にきとったやろ。顔覚えてるわ」あるとき女の人と一緒にそこに座って。初めて話しかけたとき、結婚前に妻を連れてきたことまで覚えていてくれびっくりした。息子さんと同学年だったので余計に気にしてくれたのだろう。

弟一家も含め母や子供たちまでお店でお世話になった。サライにも神戸の老舗喫茶で特集されフロインドリーブのハニートーストと英国王室御用達のジャマイカブルーマウンテンが掲載された。著名人も時折顔を見せるけどまったく平等で無頓着な接客。生粋の神戸っ子の所作。

エスプレッソマシンのコーヒーはトレボンにはおよばない。しかし、喫茶の本質は、味わう人の心に愉しさと癒しの空間を創造させることにある。コーヒーはそのナビゲーター。

お金を儲けるのとは程遠い、慈善事業の喫茶店を神戸を訪れた人に提供し続けた気高いご夫婦だった。神戸の地震の時ボランティアさんたちにも無料だった。喫茶シマエナガも物価高の昨今を鑑み、最近サマータイムセールと称し完全無料化している。豆は弟が賛助して送ってくれる。自分が味わうよりお客さんの笑顔がうれしい。「コーヒー屋やるんやったら手伝いにいったるで」マスターの言葉を思い出し、早朝から開店準備をして夜勤の申し送りを聞きに行く昨今である。